

ささやかなさ

松原俊太郎

男 生徒 先生 ミチコ タケル K

Kとタケルが拍手をしながら登場する。

K あー、ありがとうございます、ありがとうございます。

タケル お前たち、よくきてくれた。祝福しよう。何がほしい？

K 何様なの？ トランプなの？

タケル また、ここにいるみんなで、お花見、できたらいいな……

K すみません、こいつ、久々に外に出たもので――

タケル ジーザス、ファーク！

K はいはい、トランプだろうがトランプだろうがやっていくのはご免被りたいこんなご時世ですけど――

タケル 山山だよ、

K やっていきましよう。

タケル はいー、えーっと、みなさまの貴重なお時間五分ばかりいただきました、壮絶なバンドエイドの伏線、張っていきますねー

K バンドエイドみたいに言うなよ。

タケル (間) え？

K だからバンドエイドみたいに――

タケル やめときやめとき、そんな、ツッコミなんて慣れへんこと、ケガすんで？

K 重傷を――

タケル (ささやく) こいつ、Kはね、ほんとは、死んでるんです、

K 現在進行形って、このためにあったんだと思いませんか？

タケル 現在進行形のこれから、ぼくタケルと愉快的仲間たちで『ささやかなさ』っていう劇をやらしてもらおうんですけどね、

K いまや懐かしの2019年に高松で上演して、そのときからずっとぼくKは死んでて、2020年の三鷹は残念ながら中止だったんですけど死んでて、2021年、いまー、ここで！ ようやく死んでいます。

タケル　　ズーッと、死んでるんだね？

K　　こうしてお前と話ができるのなら、待ったかがあるというものだ。

タケル　　そんなに褒められると……ペスカタリアンになっちゃうから……

K　　お前ってやつは、ほんとに――

タケル　　(ささやく) 愛してるよ。

K　　ああ、ぼくのことそんな――

タケル　　ミチコ、まだかなー。(ささやく) 愛してるよー。

K　　(ささやく) 愛してるよー。

タケル　　(間) でも、ミチコはこいつのことが好きなんでシット！

K　　でも、ぼく、死んでるから――

タケル　　ミチコはタケルを好きになったんでピース。

K　　ミチコはそんな悪女でも悪魔でも悪疫でもない。

タケル　　もう、そうだって言ってるようなもんだろ。

K　　言葉は似るからいけない、ミチコは、ミチコっていう存在は(ため息)とても言葉で

は言いあらわせません！

タケル　　そもそも、存在っていうのはそういうもんだ。

K　　なんなんだお前。

タケル　　お前こそなんなんだ勝手に死にやがって。

K　　ぼくだって死にたくて死んだわけじゃない。

タケル　　っとまー、こういう感じでお話は進んでいきまして、終わりません、道徳的なふぁー

っとした音楽は、ぜったいに、流れません。

K　　え？　終わらないの？

タケル　　終わったらお前、また死んじゃうだろ？

K　　お前、めっちゃくちゃいいやつだな。

タケル　　るせえな、モクってる、大事なことだけ言え。

K　　あ、ぼくの声は資本的に、

タケル 基本的に、

K いや資本的に、こいつタケルにしか聞こえていないし、ボバディもタケルにしか見えていません。

タケル なんでだよ。

K 知らねえよ。時間の蝶番が、世界のタガがハズレてるんだろ。

タケル おれの人生、ハズレくじばかりだ、どうして、どうしてお前だったんだ。

K お前、そんなにぼくのことを……

タケル 違うね、まるっきり違う。

K なぜ、ぼくだったのか、それは、ささやかなさ、だ。そして、ぼくらはおんなじところから出発するんだ。

タケル (間) イヌか。

K そう、お前とぼくはイヌだ、おんなじなんだ。このふざけた事態にまっとうな説明があり得るとしたら、それはイヌしかない。

タケル なにわけわかんないことってんの？ バカなの？ って思ったひとは正しい、ぼくだってそう思います、でも、今日はみんなの卒業式当日なんです。バカげすぎて、くだらなさすぎる政治から、切実な生活から、牢獄のような教室から、家庭から、死から、卒業するんです。準備は、いいですか？

K (ささやく) シーっ、ミ・チ・コ、だ。

タケル (ささやく) どこ？ どこにいるの？

K (ささやく) ほら、見てみるよ……

ある高校の卒業式当日の朝、生徒とミチコが孤島の教室に入ってくる。

ひとつの机の上には白い花の刺さった花瓶が置かれている。

タケル、ミチコ、生徒が着席したところで教師が登場。チャイムが鳴る。

Kは教室の外をうろついている。

先生 みなさん、もうすぐ卒業ですね、昨日、Kくんが、いなくな

おしらせ

りました。

生徒 じゃあ、今日は、来ないんですか？

先生 今日は、とか、明日は、とか、そういう話ではありません。

生徒 じゃあ、Kくんは、卒業しないんですか？

先生 もう少し、よく考えてから、発言してください。

生徒 もう、Kくんには、会えない、そういうことですか？

先生 もうすぐ、わたしたちは、ばらばらになります。この一年間、この一瞬に、たまたまおなじ場所にいるわたしたちはもうすぐ、お星さまのようにちりぢりにちります。助けが、必要です。Kくんのことを教えてください。

生徒 先生、いったい誰に話してるんですか？

先生 誰が、誰に、というのはいつでも大事で、不思議なものですしね。

生徒 先生が死ねって言わないでください。

先生 わたしの語尾を勝手にとらないでください。

生徒 先生って、もうすぐ死ぬんでしね。

先生 死ねというために文を破壊するのはやめなさい。ひとに言ったことはチョークの線のように消せないんですよ。

生徒 だーからー誰に、話してるんですか？

先生 あなたに、あなた、たったひとりに、話しかけていたひとがいたのです。

生徒 過去形は使わないでください、そのひとは、いまもいます。

先生 しあわせなひと。

生徒 しあわせは手のひらを合わせるときにはいつでも感じられます。

先生 ほんとうに、しあわせなひと。

生徒 どうして机の上に花なんか、置くんんです？

Kくんが帰ってきたときに悲しむと思います。

先生 Kくんはもう二度と帰ってきません。

生徒 どうしてそんなことが、言えるんですか？

先生 そう、そんなことは、言えないはずですが、質問は、余計なものを言わせるための、手管のひとつです。

生徒 質問しちゃ、いけないっていうんですか？

先生 質問に、答えなくちゃいけないんですか？

生徒 お話になりませんね。

先生 いいえ、どんなかたちであれ、聞く耳と、声を発する口があれば、お話はつづきます。

生徒 なら、もっと具体的に、お話してください。

先生 Kくんの、具体的なまろもろを、思い出してください。

生徒 なーぜー？

先生 Kくんがここにいないから、ほんとうはここにいるはずだから、です。

生徒 時間です、もう終わりにしましょう。

先生 未来を断ち切るようなことばを使わないでください。

生徒 でも、Kくんの未来は断ち切られました。

そして、わたしたちの、それも。

最後のホームルームも、卒業式も、わたしたち、なんとも思っちゃいないんです。

わたしたち、最初っから、あきらめてるんです。

先生 では、あなたたちの頬を、殴りましょうか。

生徒 先生が先生でいられなくなりますよ。

先生 毎朝、辞めたいと思いつづけてはや三年です。ケアしてください！ ケアしてください！
い！(「世界の中心で愛を叫ぶ」参照) 殴りましょうか。

生徒 子どもたちを脅かさないでください。

先生 わたしたち大人は脅かしてきました。競争しないふりをして勝たなければ、個性を尊重しなければ、勉強しなければ、社会の役に立たなければ、働かなければ、それに、

生きなければ、ならない、と。

生徒 脅かすものにも、社会って、そういうものでしょう？

先生 いいえ、違います、三人以上で、つくっていくものです。

生徒 生きていなくてもいいんですか？

先生 そんなこと、言われる前から、わたしたちは、生きています。

生徒 Kくんは？

先生 Kくんは席を変えました。わたしは、Kくんを、星の位置に置いています。

生徒 星になったんですか？

先生 わたしたちは、いるひと、いないひと、どちらにも対応して、ここにいます。

生徒 わたしは、ここに、いるとは感じません。

先生 奇妙ですね、あなたは、そこに、います。わたしに対応して。

生徒 でも、明日から、先生も、わたしも、ここに、いません。

先生 でも、わたしたちは、どこかに、います。そして、Kくんも。

先生 Kくんを、思い出してください。描写してください。伴奏してください。

生徒 Kはどこにでもいるけどどこにもいない、そんな感じのひとでした。

いつも泥だらけの、羽のないピーターパンでした。

あんなにいいひとオバマとトム・ハンクスぐらいしか知りません。

女の子も男の子もイヌも猫も好きで、とりわけミチコのことを愛していました。

ミチコを見るときの目の輝きといったら、直視できませんでした。

だからこそ人間はつねに平等を意識するほかないんだとかほざいていました。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダハ持たず

慾だらけで 決シテ瞋^{イカ}ラズ イツモシヅカニワラツテ申ました。

タケルくんが花瓶を割りました。

先生 タケルくん！

タケル この花瓶には、かつて、花が咲いていました。

先生 みなさん、つづけてください。

生徒 Kくんは、ロックかコックかイヌになると言っていました。

ばいばい！ とか、元気だね！ とか、ありがと！ とか、楽しかった！ とか、別
れ際に言うといつも怒って、せめて、またね、にしてくれ、と言っていました。

ミチコが死んだらどうする？ と聞くと、泣きました。

いつまで経ってもオチがやってこないの、話、終わり？ と聞くと、まだまだこれ
からだ、といって頭を抱えていました。

でも、もう、終わってしまったのかな。

Kはどこにいったの？

わたしたちのいないところにいった。

生徒 先生、ミチコさんが寝ています。

先生 突っ伏して泣いているように見えますね。

ミチコ (顔を突っ伏したまま) 眠っても眠っても、眠いの。

タケル ミチコ、だいじょうぶだよ、ミチコ。

ミチコ イヌ？

生徒 ちがうよ、タケルだよ。

タケル のんのん、イヌだよ、ミチコ。

ミチコ (顔をあげ) イヌ。

タケル 好きだ！

ミチコ 嫌い！(タケルに張り手)

タケル いっしょに、おもきし泣いてみよっか。

ミチコ 涙が、引きこもっちゃったの。

タケル 帰省先のばあちゃん家から帰るときにさ、庭から出るのも一苦勞のばあちゃんがえっ
ちらおっちら車道に出てきてさ、肩のところまで手えあげて、壁をガリガリひっかく
ハムスターみたいに、胸の前で小刻みに手え振るんだよ……タクシーの後ろの窓から
おいらの顔が見えなくなるまでずっとね……ばあちゃん(鼻声)、おいらが見えなく
なる寸前に(ずるずる)、こらえきれなくなって(嗚咽)ぐぐって背中丸めてさ、ば

生徒　　いばいの手で口を覆うんだ、おいらもう耐えきれなくて（大泣き）
あんたが泣いてどうすんのよ。

沈黙

先生　　タケルくん、この空気、いったい、どうしてくれるんですか？

タケル　　（啜り泣き）ぼくだって、必死なんです。

ミチコ　　もういいよ。

生徒　　ねえ、いったいなにがあったの？

伊又って、なあに？

Kのこと、なにか、知ってるの？

先生　　よければ、わたしたちに、教えてください。

タケル　　ミチコ、再演してもいいかな。

ミチコ　　どうぞ、ご自由に！

タケル　　それでは、生前の再演を始めます。

タケル　　ある夕方、ぼくはKに決闘を申し込みました。ぼくらのあいだにある不公平に我慢が
ならなかったのです。大きな川の橋の下で待っていると、Kがひとりやってきまし
た。

Kとタケルが向かい合っている。

K　　どうして、ほうっておいてくれないんだ。

タケル　　知らねえよ、友だちだからだろ？

K　　トモダチ！（白目）

タケル　　おれが闘ってる相手はお前だけだからな。

K 決闘を申し込むのはいつもお前だ。

タケル 対立のネタを仕入れるのはいつもお前だ。

K ネタを対立に仕立て上げるのはいつもお前だ。

タケル お前の顔を見ると、おれ、ジャガータケルになっちまうんだ。

K ぼくはぼくのままだ。

タケル 世にあるほとんどの対立が違う場所で違う立場を振りかざして争っているなか、同じ

場所に対立するってのは高等なテクニクが必要なんだ。

K ボクサーは同じ階級で闘うじゃないか。

タケル スポーツの対立は平和を前提にしているからつまらない。

K 戦争だって平和を前提にしてる。

タケル どっちもたてまえだろ。たてまえは節約省エネなんだよ、といって別に地球に優しい

わけじゃなし。

K なんなんだお前。

タケル ちつとは考えろよ。

K ほんとうにぼくを殺す気だったのか？

タケル ジャガータケルは何も考えない。

K お前、見た目以上に危ないバカだったんだな。

タケル 闘ってるときにそれを理解しないお前がどうかしてる。

K お前の拳はぼくの知らない未来から飛んでくる。

タケル 盲点だよ、盲点を突くんだよ。

K お前、声が変わだぞ。

タケル お前の声を聞いているとボバディが（声変わり）決闘が始まるんだ。

K お前はほんものの傑物だよ。

タケル 来い。（虚空にブルース・リーの手首）

K 時代遅れだぞ、二〇二一年だぞ？

タケル 人間がいる限り、戦争は終わらない。

K そうだな、でもぼくらのオリンピックは始まってもない。

タケル お前がミチコと手を繋いだときから戦争は始まったんだ。

K お前、もしかして、ミチコのこと……

タケル ああ愛している。おれのほうが先だった。

K 順序は大切だな。

タケル よくわかってるじゃないか。

K ミチコはお前の持ち物じゃない。

タケル (殴ろうとする) わかりきったことを言われると、どうも手が――

K 手じゃなくて口を差し出せ。ミチコはそこで聞いているだろう。

タケル お、おれはミチコに愛していると言う。

K なーんだ、ただのマジックワードか。

タケル 愛は、マジックテープだ、愛が生きている限り、なんでもくつつくんだ。

K じゃあ、ぼくも、お前の愛に、くつつけてくれ。

タケル 白か黒かで、グレーはなしだ、お前がいるとグレープブルーツになっちゃうんだ。

K セツコはどうするつもりだ。

タケル つつつ痛いところ突きやがって！

K お前の素直な反応が大好きだよ。

タケル セツコはセツコだ。

K セツコが見てるぞ。

タケル 部外者を巻き込むじゃねえ。

K ぼくはミチコの恋人1、タケルはミチコの友人1、明確じゃないか？

タケル おれがミチコの恋人1で、お前はなにものでもない。

K ま、パースペクティブによるんじゃないかな。

タケル どのパースペクティブから見ても恋人はひとりだけだ。

K どうして？

タケル 恋人はひとりだけだからだ。

K 誰が決めた？

タケル 戦争しないために、人間社会が、そう決めたんだ。

K いま、戦争してるじゃないか！

タケル お前はもうすでに手遅れだ。

K いいよ、でもぼくは殴らない。

タケル 習ったばかりのガンジーか。

K それでも殴るのが警察で国家だ、お前もその一員か？ ミチコはそんなお前のことが

好きか？ ぼくは嫌いだね。

タケル おれも、ガンジーなんて、だいきらいだ。

K ぼくは、ぼくを殴らないお前が、好きだ。

タケル じゃあ、お前を殴ったら？

K 嫌いになるだろうな。

タケル どうでもいい、ミチコとキッスしないと誓え！

K ダッサ。

タケル お前の唇とミチコの唇が重なるやわらかな悪夢のせいで眠れないんだ。

K お前が信じられるのは、お前がミチコを愛している、その一点だけなんだろう？

タケル ああそうだ、それだけでおれは生きている。

K なら、お前は、ぼくも、愛するべきだ。

タケル んんんんどうして！

K お前とぼくと、この二体の身体の奥底には、ミチコへの愛がある。愛するとぼくらは

イヌになる。服従し、忠誠を誓い、なにがあっても愛しきる、ぼくらはイヌだ。

タケル 警察のパシリには、なりたくねえなあ。

K お前は、まだまだ、人間だな。

タケル どんだけリベラル煮詰めたって人間は人間だもんねー

K そうやって開き直って自然をぼろぼろにし、女を差別的な聞こえのする言葉に収束させ、高い地位を牛耳ってきたのがマン、お前だ。イヌのほうがいい。お前はイヌだ。

タケル そうか、それで？

K いまここで起こっているのは決闘じゃない、**試練**だ。ぼくはもうすぐ退場する。

お前に託したいんだ。

タケル 試練？ 退場？ 託す？ 何を言ってるんだ？

K 愛のお散歩にボバデイがついてきてくれなくてね、いたるところで糞を漏らすし、すぐに物に当たるし、自分を激しく傷つけるし、ミチコといっしょにいてもすぐに黙りこむし、何か言ったかと思うと言いたくないことばかりだし、このままじゃ、ミチコを笑わせることができない。

タケル お前がいまここで糞を漏らしてその糞をおれに投げつけたら、おれは笑うけどな。

K お前は、ミチコに、漏らした糞を投げられるか？

タケル 地軸が曲がっても無理だよ、なんとかしろよ。

K お前のなかにもイヌがいるだろう、お前にイヌを託したい。試練だ。

タケル はてなマークで胸がいつぱいだよ。

K レコーダーで録音して、何度も聞いてくれ。メモをとって、暗記して、ボバデイに刻み込んでくれ。

タケル テストに出るところだけ、教えてくれ。

K ぜんぶだ。ミチコはかわいい、かわいすぎる、でもかわいいなんて単純な言葉は使っちゃだめだった。八割がいけずで一割が ганこ で一割が素直で胸が搾られた。いきなり走り出すから怖かった。相手が死なない関係の名前ってないの？ って聞かれた、答えられなかった。沈黙はぼくには許されていなかった。唐揚げを作って大成功してぼくらの唐揚げは世界一になって、なんだってできる気がした。誰かに会いたい気持ちをとても大事にしていた。

タケル 悲しくなるから過去形で語らないでくれ。

K ミチコの機嫌が悪いときは近づかないこと。不用意な一言で怒らせたときは旅行の途中だろうがもう一日は戻ってこない覚悟を決める、とにかく謝る、おふざけはなし、

ぴんと張り詰めた空気に緩みが見られたら笑わせてもいい、でも失敗すればもう一度手を繋ぐのにもう二日必要になる、あっち行けと言われたらあっちに行け、きて、つて声が聞こえるまで、祈れ。鉄の無表情になったミチコからは信じられないような拒絶の言葉が出てくる、真に受けてはだめだが、聞き逃してもいけない、とてもつらい、イヌは悲しみの動物なんだ、悲しみから自分を守ろうとすれば、必ずしあわせからも自分を守ることになる、存分に悲しめ。あと、自分の持ち物を、とりわけ丸太のぬいぐるみを大事にしている。

タケル

丸太、の、ぬいぐるみ？

K

ああ、子どものときにもらったものらしい、でも、ただのぬいぐるみじゃない、丸太は生きている、手荒に扱えば命はないと思え、だから、ぼくらに、ふたりっきり、というのは、ありえない。ぼくらは、いつも、三人だ、丸太の声は、主にミチコの腹話術だが、丸太はたしかに声を持っている、耳を傾けて、森の奥深くの呼び声を聞くためにチューニングしろ、そうすればかならず声が聞こえてくる。

タケル

おれ、お前のこと、尊敬するよ。

K

ありがとう、出不精でなによりもベッドとおひさまにあたったお布団が好きだけど、外に出るといい顔をするから、散歩に連れてってもらおうこと。お前が怒るとミチコはもっと怒るから絶対に怒るな。抵抗すべき相手は他にたくさんいる、ミチコには服従しろ、服従は力になる。無用な批判は慎め、要求するな、待て。なにか、新しい気分、新しい点、よさを見つけたら歌でも絵でもダンスでも、なんでもいい、表現すること。ミチコは自分を大切にできないからミチコよりも誰よりもミチコを大事にすること。嘘や誤魔化しは通用しないと思え。心からと言わずに心から言え。見返りを求めるな、疲れてむくんだ足を揉め。ミチコが笑うともうなにもかもどうでもよくなる、用心しろ。でも、ぼくと同じにはならないでくれ、同じ言葉に捕まえられてもだめだ、ささやかなさを膨らませて、お前のイヌをつくってくれ。

タケル
それからは毎日が試練でした。Kは段ボールいっぱいのノートと本、日記、写真のアルバム、動画のデータを送りつけてきやがりました。ぼくはKの言うとおりにイヌになる練習に励みました。

ある日の午後、ミチコとぼくはKに呼ばれました。病院です。薄暗い受付を通過して、病室に行くと、Kのお父さんお母さんと親族の方々がKを囲んでいました。ぼくらが来たのがわかると、Kはみんなに「暫時、ご退場願います」と叫びました。みんながぼくらをじろじろ見ながら出ていって、ミチコとぼくはKのそばに近づきました。

Kは壁を背に直立し、不動で、正面を見つめる。

ミチコとタケルがKを囲む。

K
お前たち、よく来てくれた。

タケル
来たから、まだまだ行くな。

ミチコ
いまどこにいるか、言ってみて！

K
ぼくはずっとそうしてきた、学校だよ、前はファミマだったローソンだよ、初台だよ、家だよ、君の後ろにいるよ、でももうできないんだろ？ できなくなってみると、できてたことが途方もなく膨らんでいく、でもまだ、ここにいるよ。

ミチコ
動け！ 死ぬな！ 甦れ！

タケル
これで、生き直せるな。

K
ミチコはすごいよ。

ミチコ
ひとりにしないで。ひとりにしないって、約束したでしょ？

K
ぼくだって、なんでぼくなんだって思ってるよ、でも、なんでなんて神様にも答えられないし、イヌによると、なんでもクソもねえんだ。

ミチコ
マイルドヤンキーにならないで！ って言ったでしょ？

K
ごめん。タケル、すまない、メモってくれ。

ミチコ どうして勝手にいなくなっちゃうの？ どうして置いていくの？ 死なないって、約束したでしょ？

K ぼくらは死体を持ちあるく小さなイヌなんだ。

ミチコ 寿命までイヌになることないじゃない。

K そうだね、ほんとうに、笑える。

ミチコ 笑えねえよ。(本を開く) やっぱり、へべレケのゆーこと、ちゃんと聞いとくんだった、「あいつの上に横たわり、あいつの胸に顔をうずめて、手を握り合っていた。おれたちは横たわってじっとしたままだった。だがおれたちの下では、すべてが揺れていた、おれたちを揺すっていた、そっと、上に下に、右に左に。」
K 揺れていようがいまいが、ぼくらはリードでつながっている、イヌが、そこに、いるだろう。

タケル ミチコ、イヌだよ。

ミチコ わたしで、取引しないで！

K 取引じゃない、託しだ、これが、ぼくの祈りなんだ。

ミチコ 聞こえない、聞こえない！

K わかるよ、みんないつだってぼくを監視して同じひとつの声はぼくを教室の椅子に固定してひとつの壁を作ったからぼくは耳を塞いで(右手を左手で指し)このつるはしで、ぼくのボバディのなかを掘っていった(右手を喉奥につっこみ)こうやってね、
たまに嘔吐^{ユズ}いちゃったけど、

タケル 大事なものが出ちゃうから、おなかいっぱいいときにしちゃだめだよ。

K 喉の奥の、その奥に、イヌがいたんだ。

タケル コインの表と裏でグループ分けしたただけなのに敵／味方の意識が人間には生まれちゃうらしいけど、ぼくらは、ずっと味方だ。

ミチコ もう、いなくなるの？

タケル イヌは、いなくならない。

K ミチコを愛しているんだ。

ミチコ 愛してると言って実行に移したのはあなただから、わたしは愛してるとは言えない、愛していないとは言える、愛しきるといって死んでいくのはあなたなんだから。

タケル 死んでも終わらないんだ、しあわせなことに。

ミチコ わたしを、悲しませないで！

K いま、何時だ。

タケル 三時だ。

K この三時は、忘れないだろうな。

ミチコ 死んだら、忘れる、も、れない、もない。

K 忘れても、れなくても、**この三時だけが立っている**んだ。

ミチコ ねえ、悲しくないの？

タケル なんてこと言うんだ！

K なんてこと言うんだなんてなんてこと言うんだ！

タケル 悲しいことを悲しくするのをぼくらはなによりも嫌ってきたじゃないか、それが、ぼくらのささやかな抵抗だったんじゃないか。

ミチコ 悲しい、が、ちゃんとわたしたちの土台になってたときは、そう、でも、いまは、あなたの悲しいが、ぜんっぜん、わからない。

K 悲しいのはこのボバディだよ。なぜ、このボバディのために、悲しまなければならぬい？ ぼくはボバディと絶交したんだ。さあ、目を閉じてみて。

ミチコ (目を閉じ) それで？

K これからは、ぼくは、そこにいる。

ミチコ 目を閉じれば、会えるってこと？

K そう、目を閉じたとき、ぼくらは会える。見えないことが見えることになるんだ。

ミチコ 目、あけたくなくなっちゃうよ。

タケル 目をあければ、ぼくが、いる。

ミチコ ちょっと黙っててくれる？

タケル

わかった、わかったよ。

K

ぼくは覚えてるよ、もうすぐ夏つとときだった、川の向こう岸を歩いている君が見えた、白いバケット帽を被って、芝イヌを連れてたね、ぼくはわかってたよ、今から君が川に下りてって、そこで水浴びして、その憎つくき芝イヌにも水浴びをさせるってことはね、それから何年かが過ぎて、君は卒業して、いやいや大人になって生活をはじめるんだ、会った日も会えなかった日もくる日もくる日もぐるぐるお風呂でベッドでベランダで思ってたよ、君が天井の高い部屋を借りたり、カーテンを開けると急になにもかもどうでもよくなったたり、大人になれて言われたり、ひどく遅刻したり、高い高いコートを買ったり、朝まで電話で話したり、洗面所で泣きながら白いソックスを洗ったり、たこ焼きを焼いたり、真昼のワインで酔っぱらったり、イヌが邪魔になったり、ふつうに見える人たちをうらやましく思ったり、気圧に注意したり、出産を待ち望んだり、路上で男たちに声をかけられたり、ぼーっと先のことを考えて首を振ったり、くそおもしろくもないのに笑ったり、言いたいことを呑み込みすぎて便秘になったり、顔を赤くしたり青くしたり、イヌに触れられて声にならない声を滲ませたり、現実が嫌になったり、引越したり、逃げ出したり、誰かのように生きたり、川やイヌのことを思い出したりするのをね。日々の習慣どころじゃない、擦り切れたレコードどころじゃない、何度も何度もくりかえし思ってきた、だから、いや、だからじゃない、ここで終わらせなくてくれ、怒ったり泣いたり笑ったりするどんな君をも思ってるんだ、ずっとここで、泣きながら君のつづけを祈ってるんだ。ミチコ、散歩に連れてってくれて、ありがとう、ミチコの目で見る風景は、バナナ色に輝いていたよ。

タケル

ぼくらは、ミチコを、じつとよく見て、よく聞いてきた。

K

それは、これからも、ずっと、そうだ。

ミチコ

それが、いったい、何になるの？

タケル

わからない、それは、ミチコにしか、わからない。

ミチコ

いまの、わたしには、無意味しかない。

K たった一音でいい、この状況とはぜんぜん関係ない音を聞くんた。おじさんや上司や匿名の誰かの声で頭がいっぱいになったら、耳をチューニングするんだよ。いつでもどこでも **別の音が鳴っている** から。すると遠くの音が近くで、

君の腕のなかで鳴るだろう。ラジオで知らない曲がかかって、あ、この曲なんか知ってるかも！ って気がするときあるだろ？ 音は、たった一音でも、時間の性質を変えるんだ、その一音はミチコの特別な意味になって、ミチコはどこにでも移動できるし、イヌはそこで待っているんだ。

ミチコ 待って、まだ行かないで！ 言いそびれたこと……ああもう、なんて悲しい言葉なの！ まだあなたに言っていないことが、いっぱいある、でも、あふれかえって、なんにも言えないの！

K 君はいま、ひとつの運命を、窓の外から、きっと目のあたりにしているんだよ。

タケル ミチコは吐き気を堪えきれず、嘔吐しながら、病室を出ました。ご家族がじつとぼくらを見つめました。ぼくはミチコを追いかけました。よく知らないひとたちに、廊下を走るな、静かにしろ、家に帰れ、と言われました。病院もまた教室のようでした。以上、再演を終わります。

生徒 病気だったの？

タケル イヌ死にだよ。

男の声スピーカーから聞こえてくる。先生と生徒たちはマイクで応答する。

男 もう時間ですよ、集合してください、式に参加しないつもりですか？ 明日はなくて、今日が最後なんですよ、参加しないと、もう二度と参加できないんですよ。みなさん、どうしますか。式に参加しますか？

男 あのですね、生徒の意志を伺うのは結構ですが、式はそういうもんじゃないんです、みんな式に参加しにやってきたんじゃないですか？ そうでしょう？

生徒 わたしたち、自粛してらんです。

男 誰も要請してませんよ。

生徒 あなたの知らない誰かがいなくなったんです。

男 ああ、それなら、知ってますよ。

生徒 いいえ、知らないんですよ。

先生 あとで、行きますから、時間をください。

男 この足音が聞こえないんですか？ みんな移動してるんですよ。

先生 わかっています、でも、時間をください。

男 先生としての責任をまっとうされたいかがですか？

先生 わたしの責任は、この子たちを前にしたところから生じています。

男 でもねえ、あなた、公務員でしょう？

先生 みなさん、これが権力のやり口です、よく覚えておいてください。わたしは個人です。公務員は持ち場にお戻りください。

男 わたしは、何も、知りませんよ、知りませんからね。（フェードアウト）

タケル 金持ちおじさんらで構成された部分集合は国民っていう謎の全体集合より大きいらしいよ。

生徒 でも、国に何かが起こったときは、わたしたちの責任でもあるんでしょう？

先生 もし、あなたが、そのできごとの一端に、責任を感じるなら、そうです、しかし、責任は押しつけるものではありません。

生徒 国民には国民、先生には先生っていう役割があって、責任はその役割にくっついてくるものですか？

先生 ええ、でも、責任の感じ方、果たし方はひとつではなく、複数です。

生徒 複数って言われても、選ぶのはいつもひとつでしょう。

先生 複数というのは、選んだひとつが違ったら、別の、もっとマシなひとつを選べるとい

うことです。複数にすることは出口をつくることにつながります。どこでもドアは夢ではありません。

生徒　でも、その一回の過ちを、許されなければ？

たくさんドアが一斉に閉められる音が聞こえてくるんでしょう？

先生　社会には法や規則といったものがありますから、きょうのできごとで先生は学校に許されず、処分されるかもしれません。でも、それで、終わり、ということではありません。許しは乞い求めるものでも与えるものでもなく、勝手にやってきたり、やってこなかったりする、不可思議なものです。

生徒　責任を感じないひと、果たさないひとには、どうしたらいいんですか？

先生　そのひとと、いっしょになって、思い出すことです。

生徒　じゃあ、先生は、わたしたちに責任を感じさせるために、思い出させたのですか？
先生　いいえ、時間を止めるため、立ち止まるため、です。

生徒　宙ぶらりんなのは、いつものことで、気持ちいいんだけど、もう会えない、もう触れない、だけじゃ、狂ってしまいます。

タケル　イヌは、ここに、いるよ。

生徒　イヌって、なに？　ミチコのイヌになったの？

タケル　ミチコのイヌだし、みんなのイヌだ。

ミチコ　みんなの、イヌなの？

タケル　いや、ただのイヌだ。

生徒　ミチコはいいよねえ、特別で、特別に扱われて。

ミチコ　わたし、ふつうの女の子だよ？　だってわたしね、**しあわせな家庭**

のしあわせな食卓に犯されてるの。

タケル　そっかそっか、そいつはおだやかじゃないね。練習しよう。先生、いいですか？

先生　練習って、何をするつもりですか？

タケル 「しあわせな家庭のしあわせな食卓」をやってみて、んなもんは馬鹿げてるってことを証明するんです。アルコール依存症のひとが目の前にウイスキーの瓶を置いて我慢して我慢して結局飲んじゃって負けを認める、みたいな感じですね。

ミチコ わたしのこと、馬鹿にしてるの？

タケル とんでもない！ ぼくだって、ミチコとの「しあわせな」生活に犯されてるんだからね、練習しよう。

ミチコ いいよ、わたしは妻、あなたは夫ね。

生徒 わたしたち、何を見せられるの？

ミチコ あなたたちは第三者、なんでもいいから、やってみて、ね、イヌ、帰ってきて。タケル いるよ、ここに。

K がト書きを読む。

K 違う、帰ってくるんだ、ここに。

タケルは立ち上がる。

ミチコは一人三役。

黒板にーLDKの間取りをチョークで書く。

K 扉は突然、開かれる。

タケル (扉をあける) ただいま。

ミチコ (妻) おかえりなさい、大好き！ (ハグ&キス)

タケル (ネクタイと抱擁をほどく) きょうもハードにボイルドされてテラテラ火照ってて

(間) 愛してるぜ。

ミチコ (妻) きょうはいい一日だった？

タケル クソ疲れたけど(間)愛してるぜ。

K 猫がお前の足を賞で、お前は喜びに浸るだろう。

ミチコ (猫、タケルの足に頭をすりつける)

タケル おう、おうおう！

ミチコ (妻) あなたはドアを静かに閉めてくれるから助かるわ、隣りの奥さん、旦那の立てる大きな物音でノイローゼになっちゃったんだって。

タケル そりゃあどうも、いけませんな。(腰を下ろしアイフォーン)

K お前は画面から目を上げ、近づいてくる肉の存在を認知する。

ミチコ (妻) はい、どうぞ。

タケル アップルパイとポテト？ 朝マックかよ。

ミチコ (妻) 甘そうで甘くないちよっぴり甘い砂糖もあるよ。

タケル 砂糖はとびきり甘いやつにしてくれ。

ミチコ (妻) 今度からそうするね。

タケル なんかやだなーって気分がむっくり、なんでだろう。

K 思い出せ、みんなが家ではお前と会話していたことを。誰かがお前ひとりに向けて言葉を発するということが、本当にあったんだ。

タケル (ミチコの顔を凝視) ミチコは、食べないのか？

ミチコ (妻) 食べたよ、れんこんバーグ。

タケル ごちそうさま！

ミチコ (妻) 明日また作るね。

タケル 　ごちそうさま！

ミチコ 　変なひと。

タケル 　きょうはやさしいね。

ミチコ 　きのうもやさしかったでしょう？

タケル 　うーん、まあ、そうだね。

ミチコ 　でも、きょうは立ちっぱなしで疲労コンバインだわ。足、揉んでいいよ。

タケル 　ありがとう。(揉む)

ミチコ 　(妻) ねえ、おもしろい話して。

タケル 　帰りの電車のなかで、ぼくらはみんなジャック・ニコルソンなんだ！　って叫んでる

やつがいたよ。

ミチコ 　ふふふ。

タケル 　ああ、ぼく、しあわせだなあ。(加山雄三)

ミチコ 　それで、きょうは、どんな一日だったの？

タケル 　(足を放り出し、ぱたぱた) リストラされちった。企業イメージに傷がつくから早期志願退職って体裁でね、ほんま、わしらのハートの傷どないしてくれまんのって話やで、まあ先方は？　退職金と金券サウナで堪忍して？　ってなことらしいわ、あああほらし長年務めてきてこれやでえ？　ま、勤続年数長過ぎの金属疲労やもんな、しゃあない、チェンジリングや、なんにでも終わりがくる、せやから、わしは役を降りる。次の役は、イヌや。

K 　カーテンはひらひらと翻る。するとその下で、すべてのものが、いつのまにか位置をずらしている。

ミチコ 　別れましょう。

タケル 　え？　愛は？　しあわせは？

ミチコ 　貧乏は無理。

タケル
(頭を抱えて) ウソダクソダソウダウソダクソダソウダウソダクソダウソダク
ソダソウ……

タケルは窓際に歩いていき、窓の外を眺める。

タケル 椅子も、窓も、世界も、なにもかも糞だ。

K そう、これからは主人なし、だ。

タケル 他人のただの気分につき合うコストは高く付くから、みんなひとりでいるんだね。

K それでもいっしょにいたいと思うから愛だ、お前が拗ねたら世界は終わる。

タケル 世界って、脆いんだな。

K そう、たったひとつの世界はボタン一つで一瞬で壊れる、でもお前はひとつじやない、タケルであり高校生であり片想いするイヌでありぼくであり、たくさんなんだ。

タケル ああ、もうたくさんだ！

K 卑屈な人間にかける言葉はない。

タケル ああ、待ってくれ、行かないでくれ。

K 窓から顔を出してみろ。

タケル ……いい風！

K 窓から身を乗り出せ。

タケル え？

K 死体を窓から投げ捨てろ！

タケル やだね！

ミチコ ねえ、なにひとりでブツブツ話してるの？

タケル だってミチコが――

ミチコ マルちゃんが怖がってるじゃない。いま、大事な時期なのよ。

タケル (棒読み) おおもうそんなに大きくなったのかすごいなあマルちゃんおめでとう。

生徒 パパ、わたしがおばさんになったらわたしのお婿さんになってね。

タケル パパはね、ママだけのお婿さんなんだ、一夫一婦制っていうのはね、手強いんだ、これが！

ミチコ (妻) ねえ、あなた、誰と話してるの？

タケル え？

ミチコ (妻) この子よ (丸太を差し出す)。

ミチコ (丸太) 変な顔。

タケル やー、やっと会えたね、マルちゃん。

生徒 パパ、目を覚まして！ それはただの丸太、わたしがほんとうのパパの子ども、ねえ、目を覚まして！

タケル あーっと、んーっと、おれはどっちも生んでいないぞ！

生徒 生まないでいいから、認知して、パパ。

タケル ああ、迷いイヌだね、さあ、おいで、わしゃわしゃわしゃ、餌をあげよう。閉じた「家庭」のエントロピーはけっして減少しないからな。あらゆる「家庭」は原則として崩壊するんだ。

ミチコ (妻) 現実の物理法則を「しあわせな家庭」に持ち込まないでくれる？

ミチコ (丸太) ほんと、やんなっちゃう。

タケル ああ、そうだ、ぼくは別の現実にただいまと言ったんだ。ただいま！
もう寝ましょう。

タケル このまま壊れよう、ふたりっきりで壊れていこう。

ミチコ いいよ、閉じこもって、ふたりっきりで。

タケル うん、

ミチコ 同じ夜に同じベッドで同じ夢を見て、ね、眠りましょう。

沈黙

生徒 とんだ茶番じゃないの。

ミチコ 茶番じゃないものってこの世にある？

生徒 先生、助けてください！

先生 ありますよ。

ミチコ もう決まってるの、タケル、逃げないでね。

タケル え？ ぼくで？ いいの？

ミチコ わたしはいまここで思い出してるの、正確には、わたしはしあわせな食卓がある場所

からいまここに居る彼を思い出しながら、彼の帰りを待ってるの。

タケル 彼って……ていうか、それは……逆に距離が遠くなるんじゃない？

ミチコ そうなの！ いつまでも手が届かない。

タケル やめときなよ。

生徒 ふーん、あんた、そーゆー男なんだ。

タケル そーゆー男！ どーゆーそーゆーでも言われたかないやつだ！

ミチコ 知ってる、あんたはそーゆーのと違うから空も飛べるはず、これはわたしが、いい

え、わたしたちが **制作中のイメージ** なの。

生徒 ただのままごとじゃん。

ミチコ 日常ってのはね、絶えざるままとの練習なのよ、毎日毎日同じこと繰り返してるよ
うに見えても常にそこには別のものが紛れこんでくる、いまやったこと現実じゃない
と思った？ 書き割りの1LDKって？ 書き割りじゃない1LDKがあるっていう
ならわたしをそこに連れてって。

タケル 考えることはイメージに始まりイメージに終わるっていうけどさ、1LDKも「しあ
わせな家庭」もゴランノスポンサーの提供でお送りされたできあいのイメージだろ。

ミチコ わたしたちは現実の外側から見たほうがいいって教育された世代で、手元で見た映像
を現実にオーヴァーラップさせるのが得意なの、荒れ果てた家、被災地、耕作放棄
地、きらびやかなモール、どこだろうがどこかで見たことがあるところにいるわけ、
書き割りくんなのよ。

タケル じゃあ、ぼくは書き割りくんをぶち壊そう。(ミチコを抱きしめる)

ミチコ あらあら、そんなことして、わたしが、いま、どんな顔してるか、わかる？ ホアキ
ン・フェニックスに抱きしめられたグウィネス・パルトロウの顔よ、それに、むかし
Kに抱きしめられた感触を思い出してる。

タケル (ミチコの顔を見る)

ミチコ 殴りたい？

生徒 パパ、ママ、喧嘩しないで。

ミチコ (猫、首をタケルの足になすりつけ鳴く)

タケル マジで君が何考えてるのかわからなくて愛が、愛が！

生徒 (娘) パパ、ミチコのこと好き？

ミチコ (猫、なすりつけ鳴く)

タケル (仰向けになり腹を晒し喉を鳴らす)

生徒 これが、「しあわせな家庭」？

わたしは無理。

先生は、どう思いますか？

先生 わたしは、おままごとが終わってしまおうのが、残念です。これが、ずっとつづいてい
くのなら、「しあわせ」と言えるかもしれませぬ。

生徒 地獄じゃなくて？

タケル (復活) 地獄ってのはさ、みんなが同じこと考えて同じこと言って同じようにうなず
きあってる状況のことだと思っただよぬ。

先生 その同調が、ずっとつづく、ということはあり得るでしょうか。

タケル どこかで、ささやかな齟齬が発生するでしょうね。

先生 であれば、地獄は地獄ではなくなりますね。

ミチコ だーかーらー、「制作中のイメージ」だって言ってるでしょ？ 何なの？ まとめて
みないと不安になる症候群なの？

生徒 ねえ、ミチコ、どうしちゃったの？ もう、悲しくないの？

ミチコ はいはい、現実を直視せよ、そして悲しめ、ってわけね。

生徒 ぜんぶの表情が傷ついてるように見えるけど。

ねえ、だいじょうぶ？

ミチコ 危ないから近づかないで。ゆっくり考えたいの。(熟考中)

生徒 べつに、ただ話してるだけじゃん。

ミチコ 同情って、かわいそうって顔を食べることだね。(熟考中)

タケル そう、かわいそうって顔を口にふくむと最初は酸っぱくて、後追いで甘くなって、ほかに変えられない味がするからね。そいで見返りになにかしてあげたくなるんだ。

生徒 どうして食べるのになくならないの？

タケル 食べるんじゃなくて舐めるんだよ。舐めさせてくれ。

沈黙

ミチコ わたし、クララは立たないほうがいいと思

うのよ。

沈黙

タケル やっぱミチコやべえわ。

生徒 クララ？ あの、アルプスの少女ハイジのマブだちの？

クララが立たないと泣けないじゃない。

タケル (ハイジになる) クララが立った・ない、みんなは泣か・ない！ クララが立った・

ない、みんなは泣か・ない！

生徒 いーや、クララが立たないと誰もハイジなんか見ないよ、暗いよ。

ミチコ それもまたひとつの現実でしょう？

タケル たしかにクララが立てないってこともあり得るね。

ミチコ 可能世界の話してんじゃないの、クララが立たずに走る世界があるってこと。

タケル やばいよミチコそれはやばい。

生徒 車椅子で走れば？

タケル あ？ あー！

ミチコ 車椅子なしにキマってるでしょ、クララに不可能はない。

生徒 やっぱユーキャンのオバマキャンペーンじゃん。

タケル (空気椅子の姿勢のまま走る)

ミチコ ふふふ。

タケル ああ(頭を抱える)

K (走りながら) その、含み笑い……ふつつつって一音はふつつつと消えるほんと極

上の響きだな……五里霧中のホワイトノイズの奥の奥をかきわけていけば、そこには必ず、「ふふふ」が紛れこんでいる……

生徒 そんなの嘘。そんなクララどこにもいないじゃん。

ミチコ ほざけおざけん。

タケル (！) ほざけおざけん……！

ミチコ ああ、ごめんさい、つかっとなつて……でも、イヌが死んじゃうような、こんな世界では生きていたくないの。

生徒 いいよ、ミチコはクララが立たない世界で生きていくんだね。

ミチコ ええ、そして、ついてきてくれない？

タケル 目をつむっても、あけても、そこにはまだ、イヌがいるんだ。

生徒 でも、そんなイヌだって、いつかは、いなくなっちゃうでしょ？

ミチコ たしかに、イヌがいなかったら、世界はまったく別ものだったし、イヌなしじゃ、わ

たしも、教室も、みんなも、なにかもが違っていた。

K クララは立たない、イヌは消えない、お前がこうしてぼくの声を聞いているみた

いに、濃密で多重の現実はたくさんに分かたれたまま進んでいくんだ、消えないイ
又、これがぼくらの編み出した新しい関係の名前だ。

タケル そう、これからは、消えないイヌだ。

K ここにはぼくが何度もキスをしたくちびるがあった。おまえのじょうだんはいま、お
まえのたわむれは、おまえの歌はどこにある？ さあ、音楽の時間だ。

タケル ミチコ、みんな、聞いてくれ。

ミチコ 何？

タケル 消えないイヌの歌だ。

(音合わせ)

くれーなずむまちの

K ひかりと違う！

タケル はるいろのきしやに

K 乗るな！

タケル なかしたこともある

K 泣かすな！

タケル あの、すばらしいあ

K やめろ！

タケル たったひとつのこと

K 約束、は大事だけど。

タケル そつぎょーしゃしん

K のあのひとはぼくだけだ。

タケル (咳払い、歌う)

想像してみて

一匹のイヌが帰ってくる

夏の明るい夕方 透明な空気 ひとけのない街

歩いてくたく 湿った土からケミカルな匂い

くんくそくんくそ、

いい匂いのするほうへ　そこにはひとりぼっちの君

くん、くんくん、

顔を舐めてごあいさつ

君はイヌを突き飛ばし　抱きしめる　見事なダブルバインド、

もう離れられない

お散歩の時間だ

あれが花で、これが手で、それはうんこ、

何を言ってるのか　イヌにはわからない、

君の手と目が世界を彫刻するパターンを感知する

そしてもちろん　ボバディバリバリ震わせる君の声、声、声

つつつと　とつぜん　聞いたことのない音が鳴る

イヌが見あたらなくなる

イヌーっ、イヌーっ　と君の声

消える音　消えないイヌ

イヌの足跡はそこかしこに

イヌの匂いはあたりいちめん

また別の音が遠くで鳴る

ばらばらな足音が近づいてくる

たくさんの群れになって

イヌが帰ってくる

生徒、先生は拍手。ミチコはイヌをハグ。

ミチコ

イヌー！

先生

みなさん、卒業おめでとございます。

ミチコ 散歩の時間だね。

タケル ああ、行こう、散歩に。

沈黙

タケル なあ、これでいいのか？

K ああ、了解した。

